

# 6 リアル・バーチャル融合時代の 現実感覚・行動・文化変容

あなたはパソコンの前で「嘔吐」するか？



中尾 元  
NAKAO Gen

追手門学院大学 / 経営学部 / 特任助教

2020年、社会の急速なオンライン化に違和感を覚えた人は多かっただろう。昨今まれにみる行動変容の大波は、歴史的な文化変容を巻き起こすのかもしれない。この時代の変化に、どのような態度で臨むべきかについて考える。

## 当たり前が当たり前でなくなる？

大仰な副題を付けたのには理由がある。

2020年の春以降、例えばビデオ会議の手段を用いたリモートワークやオンライン授業という情報伝達の手段が様々な分野で導入された。これにより、これまで人と人が直接会って行っていた様々な社会活動がオンライン化された。筆者も、大学教員として大人数の授業から教授会、学生面談などでオンライン形式でのやりとりをする機会が増えた。このなかで、いくつかの興味深い問いが様々な人により提起されたように思う。

例えば、「むしろこれで良いのではないか?」「以前のようになんか直に会わなくてよいのではないか?」といった論調である。この論調で更に問うことができるのは、では逆にこれまで私たちが依拠していた「現実」や「現実感覚」というものは、これほどあっさり2次元に回収されるほど「平坦な」ものであったのか? という点である。ついでに言えば、オンライン化に回収されえない、2次元ではすくいとれない、常に余白として画面には写せない「何か」とおそらく呼応する形で、私たちは、少なくともはじめのうちはオンラインのコミュニケーション・ツールに違和感を抱いていたのではないかと、という点もある。ビデオ会議の形態は、はじめ不思議な疲れの感覚があったという人も多い。

私たちが以前取り囲まれていた現実というものを再考するにあたり、オンライン化による「違和感」はかえって重要である。

このうえで、「嘔吐」についてである。

1938年に著されたサルトルの小説『嘔吐』で、主人公

ロカンタンがあるきっかけで吐き気を催すシーンがある。その後、普段当たり前としていた世界や自身の存在に対して、様々な思索が展開される。もちろんこの小説の内容をそのまま敷衍することはできないが、当たり前を当たり前と思えなくなる経験は、ひょっとすると私たちが2020年以降置かれている状況とどこか通底するのではないだろうか。現実感を軸にこのような小説を読むと、現在は新しい「リアルとバーチャルの融合時代」のようにも思えてくる。

断っておくが、筆者はオンライン化に一辺倒に反対なわけではない。行動変容という大きなテーマを考えるにあたり、まさに社会・文化の変容の最中にある私たちの現実感覚を考えてみたい。

## リアルとバーチャルの融合

オンラインのコミュニケーション・ツールが、これまで私たちが当たり前抱いていた現実感覚や対人的な感覚を揺るがすのではないかと、という視点はすでに述べた。そのうえで興味深いのは、リアルとバーチャルとは二項対立の概念ではなく、むしろ、バーチャルの現実感覚が変化し、そのことによってリアルの現実感覚も変容していくだろうという循環的な点である。

例えば、数々の文化的なスキャンダルで話題を呼んだ寺山修司は、演劇の可能性について、「現実をイリュージョンによってくつがえす。現実が別のイリュージョンとして定着したときに、それにまた別の現実がぶつかって、限りなく現実とイリュージョンは葛藤していく」という趣旨のことを述べている。もちろんオンラインのこ



写真1 様々な領域で、リモート・ワークやオンライン教育が講じられた

ミュニケーション・ツールは、イリュージョンではないし虚構でもないが、これまで当たり前に依拠してきた現実でもない点で、彼が演劇によって行おうとしていた日常生活への揺さぶりに成功している。

同様の例として、リアルとバーチャルとが切り離されることなく、むしろ円環的であるゆえに効果を生んでいる話もある。例えば、日本の中高生の日常として、ライトノベルを読み、一種のバーチャルの世界のなかでいじめや痛みを体験し、それが現実世界で他の人への配慮などに影響を与えていくといった事例である。仮想的な世界が、一種のトレーニングの場として機能しているのである。

このような点を見ると、バーチャルの世界のほうにリアリティを感じる(重きを置く)比重が高まってきているようにも思える。

## 現実感覚の変容

社会学者マニユエル・カステルの言葉を借りれば、私たちはvirtual reality(バーチャル・リアリティ)に興味を惹かれる一方で、すでにreal virtuality(現実的な仮想世界)の中に生きており、コミュニケーションのために構築されたオンラインの網の目から抜け出して生きる

ことはできなくなっている。特に重要なのは、このネットワークそのものが「自分とは何者か?」を表現し、他者に追認され、自己イメージを構築し、表象する場として、私たちと切っても切れなくなっている点である。もはや、SNSで表現される自己像や、そこでの情報のやり取り(象徴の交換)こそが、(オフラインの)現実よりも現実らしく、もっと言うと、仮想的な場でしか立ち現れない自分こそが自分であるという事態になっている可能性がある。

上記のようなreal virtualityで興味深いのは、もはやオリジナル(現実)とコピー(現実の複製)という考えは成立していないという点である。この点について、思い出されるのは映画『マトリックス』である。この映画の監督たちが傾倒していたジャン・ボードリヤールという哲学者がおり、映画のなかで彼の書籍が一瞬登場する場面がある。現代社会では、本当は裏に「実体」があつて、その代わりに「仮想」のものでやり取りをしているというよりも、絶え間ない仮想の次元での記号や表象、象徴の交換のやりとりこそが「リアル」になっている可能性がある。

このような見地に立つと、今後検討すべき課題も多い。人が日常的に抱いてきた出会いと別れの感覚はこ



のようなリアルとバーチャルの融合の時代にどうなるのだろうか？ 初対面の人と話す緊張の感覚はどうなるのだろうか？ 対面で、徐々に友人と語らう感覚はどうなるのだろうか？ 更に言えば、対面で一度も会ったことがなく、よくビデオ通話をしていた人が亡くなった場合の感覚は、そして「喪の作業（何らかの喪失体験のあとに生じる心理的な過程）」はどのようなであろうか？ ネット上に残るSNSのアイコンは、道端の墓標のようになるのだろうか？ 私たちは新たな感覚を得ていく（築いていく）のであろうか？

検討の一材料として、心理学では「現実感尺度」というものが開発されている<sup>2)</sup>。もちろん心理学調査でわかるのは全体の一部であろうが、人々が何をもちてリアリティを感じるかについて、改めて考えるときが来ているといえる。

### ビデオ会議の文化的側面

これまでリアルとバーチャルの融合における人々の現実感覚の変容の可能性について述べたが、それを「縦糸」としたうえで、「横糸」としてあくまでリアルでの文化間での影響についても考えてみたい。というのも、ビデオ会議では、一人ひとりが正面を向き、若干オーバーな身体表現をし、そのような個人という単位はくっきりと輪郭を持ちつつも、その個人どうしが交わることについては一定の気軽さ（気楽さ）がある側面などを見ると、北米的な文化の行動様式が流出しているように思えるからである。これは、テクノロジーという媒体物を介した文化の変容を考える材料になりうる。

### 今後の文化変容の可能性

文化について考えるにあたり、文化的な意味や象徴が端的に反映される幸福観を見てみたい。もちろん、この条件を満たせばあなたは幸せです、というような客観的な基準がなかなか見えづらい分、幸福についての研究は一筋縄にはいかない。ただ、特定の社会ではこういう状態を指して幸福とみる人が多いようだ、と一歩引いてどのような幸福観がどのような文化社会の人々に共有されているかをみることは可能である。

幸福観は比較文化的な観点から、北米的な幸福観と日本的な幸福観の2種類が検討されてきている<sup>3)</sup>。

北米的な幸福観では、個人の自由や選択を重視し、自己価値の実現や自尊心の高さを重視するとされる。競争は良いもので、それによって個人は鍛えられ、競争は社会を豊かにするであろうという信念が言われる。個

人の成長のモデルとしても、社会の成熟にしても、単線的なイメージである。ここには、個人が何らかのものを目指してそれを獲得することが幸福につながるという価値観がある。

一方、日本的な幸福観には、幸福の陰陽のバランスを重視し、とても良いことがあると次に悪いことがあるのではないかと心配になったり、あまり立て続けに良いことが続くと、自分は人生の運を使い果たしているのではと不安になったりする価値観がある。幸福の材料が有限かもしれないと考える側面もあり、円環的なイメージである。また常にほかの人の目を気にする側面（評価懸念）や、人並みがつまるところ幸せであるとする考えや、他者が幸せになればそれがまわりまわって自分にもやってくる、という信念などが言われる。これらの協調的な幸福観は、前者の獲得的な幸福観における価値観で見過ごされてきた点をすくいとることができる観点として注目されている。

先述のように、ビデオ会議の形式が北米的な文化の



写真2 スマートフォンを手に、この人は、どこを「歩いて」いるのだろうか？

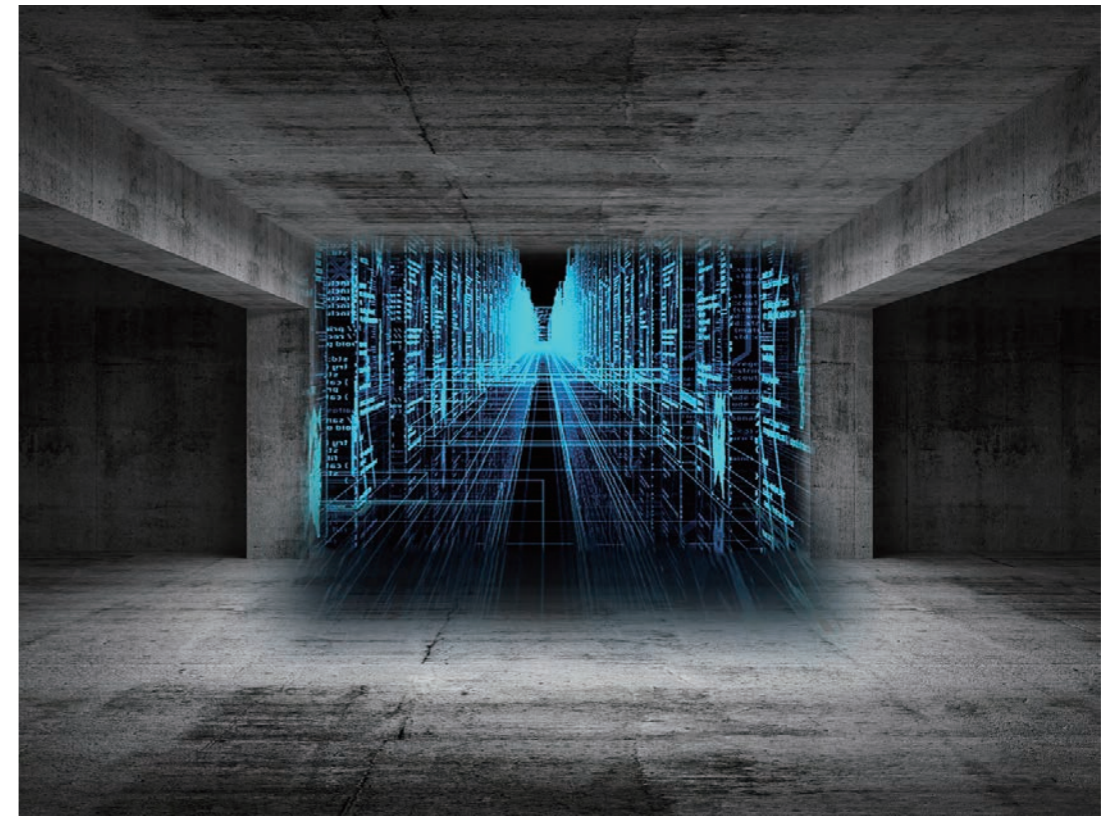


写真3 Real virtualityは私たちの現実感覚と今後どのように相互作用するのだろうか？

行動様式である可能性を加味すると、今後の日本社会は、文化間の影響に伴って、幸福観などを皮切りに、文化のあり方や人々の行動様式が変容していく可能性がある。そのような時代の変化に私たちはどのように対応していけばよいのだろうか。

### 私たちのとりうる行動

筆者はこれまで、異なる文化背景を持つ人と関係構築をするための方略である異文化間能力、というものを研究してきた<sup>4)</sup>。社会が混迷する状況下では、外国という意味の異文化に限らず、前提や背景の異なる人々といかに関係を構築ができるかの視点が重要となる。これは、経済的な分断だけでなく、社会的な人間関係の断絶をいかに食い止めるかということが目下重要であると考えられるためである。

この観点では、他者との共存のための態度として、「判断の保留（エポケー）」がますます重要になっていると思われる。これは、他者や外界からの何らかの情報に対して、性急な良し悪しの判断を差し控える態度であり、自身の認識を固定せず絶え間なく留保し、自分が認識しているものを慎重に確かめようとする姿勢である。この姿勢は、ピュロン（紀元前360年頃から紀元前

270年頃）によって実質的に創始された哲学や、現象学と呼ばれる現代思想の系譜に立つものである。従来のような対面の接触が少なくなるリアルとバーチャルの融合時代こそ、私たちの関係構築のための姿勢が問われている。

本稿は、去る2020年という年が歴史のなかで新たな「精神史」の転換点として刻まれるのではないかという観点で書かれた試論である。今後の実証研究だけに留まらず、社会の変化における歴史的な検証を待ちたい。

#### <引用・参考文献>

- 1) David Bell (2007). *Cyberculture Theorists*. Routledge
- 2) 柿本敏克 (2010). 「状況の現実感尺度の項目改訂」『群馬大学社会情報学部研究論集』17, 37-45
- 3) 内田由紀子 (2020). 「これからの幸福について-文化的幸福観のすすめ」新曜社
- 4) 中尾元 (2019). 「異文化間能力の前提、資質の種類と実証的課題:これまでの枠組みと今後の展望について」『異文化間教育』50,111-123
- 5) J-P・サルトル (著)・鈴木道彦 (訳) (2010). 『嘔吐 新訳』人文書院
- 6) 寺山修司 (1975). 『書を捨てよ、町へ出よう』角川文庫
- 7) David Bell & Gill Valentine (2007). *Consuming Geographies: We are where we eat*. Routledge
- 8) Erving Goffman (1956). *The presentation of self in everyday life*. Doubleday
- 9) Edmund Husserl (2012). *Ideas: General Introduction to Pure Phenomenology*. Routledge
- 10) Jean Baudrillard (著)・Mark Poster (編集)・Jacques Mourrain (訳) (2002). *Jean Baudrillard: Selected Writings: Second Edition*. Stanford University Press
- 11) 鶴見俊輔 (2001). 『戦後日本の大衆文化史: 1945-1980年』岩波現代文庫
- 12) J・アナス (著)・J・バーンズ (著)・金山弥平 (訳) 『古代懐疑主義入門-判断保留の十の方式』岩波文庫